



学習評価とフィードバックの重要性 ー形成的評価で学びが変わるー

信州大学教育学部
附属次世代型学び研究開発センター

森下 孟

morisita@shinshu-u.ac.jp



本教材のねらい

- 教師の評価観をアップデートする
- 形成的評価の原理を理解する
- タクソノミーを使った評価設計を学ぶ
- フィードバックが授業とカリキュラムを変えるプロセスを理解する



評価観の転換： 成績付けから学習支援へ

- かつての評価：学習結果の測定・成績処理
- 現在の評価：学習を支援し質を保証する営み

評価＝授業の一部・カリキュラム改善の起点



学習観の変化と評価の役割

- 行為主義 → 構成主義へ
- 学び: 正答の取得ではなく「理解の再構成」
- 評価: 学習者が自分の状態を理解し、
次の一步を決めるための情報
- 教師: 授業とカリキュラム改善のために
評価を活用



形成的評価とは

- 途中経過を捉えて学びを支援する評価
- 目的:できていない点の指摘ではなく,
学習改善の方向性を提示
- assessment for/as learning

つまずきを早期発見 & 授業中に軌道修正



形成的評価の4原則

1. 途中で行うこと
 - 学習が終わってからでは遅い
2. フィードバックが不可欠
 - 理解され, 行動に移されて初めて意味をなす
3. 指導と一体化
 - 評価は授業の構造そのもの
4. 自己調整学習を促す
 - メタ認知の支援装置





評価の基本プロセス

- 情報収集（テスト・観察・記述など）
- 判断（基準に照らして解釈）
- 意思決定（指導改善・カリキュラム改善へ）

テスト実施＝評価ではない

改善まで含めて評価である



ICT・AIを用いた形成的評価

- 小テスト自動化と誤答分析
- 授業記録映像のAI分析
(発話量・対話の深さ等)
- 生成AIによる初期フィードバック
(記述課題の支援)

学習プロセスの可視化が容易になりつつある



タキノノミーとは何か

- 認知レベルを「記憶 → 理解 → 適用 → 分析 → 評価 → 創造」の6段階で整理
- 改訂版では知識の種類も分類
 - 事実・概念・手続き・メタ認知
- 目的：
目標・指導・評価を整合させるための設計理論



タキノノミーで評価が変わる

- 「何を扱うか」ではなく
「どの認知レベルを目指すか」を設計
- 内容中心 → 思考中心への転換
- 高次目標に合わせた
評価問題・授業活動の設計が可能

“覚えて終わりの授業からの脱却”



深い学びに向けた評価の視点

- 理解の再構成が見えるか？
- 思考過程を評価できているか？
- 認知レベルの段差が明確か？
- 指導と評価が対応しているか？

深い学びは評価設計からはじまる



形成的評価と授業改善

- 事例1：小学校算数
 - －途中式の段階で回収し，思考プロセスへフィードバック
 - －つまずき分析 → 翌年度の単元内容改善へ
- 事例2：中学校英語
 - －ルーズブリックとピア・フィードバック
 - －「評価する側の視点」が自己調整を促す



フィードバックの3つの問い

1. どこへ向かうのか（目標）
2. 今どこにいるのか（現状）
3. 次に何をすべきか（方略）



ギャップを埋めるための具体的行動を示す



フィードバックのレベル

- タスクレベル: 正誤・質の改善点
- **プロセスレベル**: 思考方法・解法の改善
- **自己調整レベル**: 学習のモニタリング方法

**自己レベルのコメント(「えらい」「だめ」)は
効果が低い**



評価・フィードバック・ カリキュラム改善

- 評価は個人ではなく「学校の資源」
- 評価データを共有し、つまずきの構造を分析
- 単元・学年・学校レベルで改善につながる
- 評価 → フィードバック → 授業改善 →
カリキュラム改善 の循環



まとめ

- 形成的評価は学習者の成長を支える中核
- タキソノミーで思考の深まりを設計
- フィードバックは学習と授業の質を高める
- 評価は授業改善だけでなく、学校のカリキュラム改善につながる

評価は終わりの儀式ではなく、

“学びを始める合図”である